

読書通信



No. 151

① 劣化し続ける政治、袋小路の経済金融に企業、脅かされる平和と、石橋湛山の現代的意義が見直される事象ばかりである。「もし今、湛山ありせば」と考えてみることは、私たちに突きつけられた課題を自らに問うことにほかならない。増田弘『石橋湛山』（ミネルヴァ書房、3780円）は湛山研究の第一人者による、現時点における最高の湛山論である。

ジャーナリスト、エコノミスト、政治家、思想家としての波乱の生涯を、石橋湛山全集全16巻はもとより多くの文献や証言を駆使して、見

事に描き切っている。そしてそれらに挟み込まれた著者のコメントには教えられるところが多い。湛山の言説だけでなくその時代背景や彼を取り巻く人々の動きなどにも光を当てて、充実した明治・大正・昭和史にもなっている。終章「湛山イズム」はその主義主張や行動の基底にあるものを簡にして要を得た分析で締めくくり読者の理解を助けるだろう。400ページ近い大冊だが、一気に読了した（これぞ湛山の魅力か）。本書と湛山の評論集（たとえば岩波文庫）を併読すれば、湛山理解は一挙に進むはずだ。

② 経済人でこれほど活字好きの人は寡聞にして知らない。読書の傾向もとても個性的だが、その人の読書論が初めて出た。丹羽宇一郎『死ぬほど読書』（幻冬舎新書、842円）がそれ

で、経済人らしい視点がたくさん織り込まれているところが特徴である。旺盛な好奇心が猛烈な読書の原点にあることが浮かんできく。

読みながら考えることが大事で、ハウツー本やベストセラー本は読まない、本にカネは惜しまない、人を見る目は本で養われる、など本をめぐる多様な生き方、勉強の仕方、見極める力のつけ方などが述べられて、大いに参考になる。ほんとに幸せな人生だなどほぼ全編、同感し、読書のない人生なんてと改めて口走りかけた。

③ ゴルゲ事件のことは多少は知っているつもりだったが、孫崎享『日米開戦へのスパイ』（祥伝社、1836円）でその自覚は根底からひっくり返った。なにしろ、ゴルゲや尾崎秀実のスパイ行為はそれほど貴重な情報ではなかった、

というだけでなく、尾崎逮捕の日にちが1日ごまかされたことが東條陸軍大臣による近衛首相追い落としに直結していたというのだから。とにかく奇奇怪怪、ほんとに東條という男は、と思いつつ、昭和史の（重大な）一コマを学んだ。読書の楽しみ、ここにありだ。

④ 久しぶりに小説を。楢周平『和僑』（祥伝社文庫、745円）は宮城県緑原町を舞台に、老人定住型施設を成功させたものの、いざれ住人たちが高齢化して町はまた寂れるだろうと心配する町長が、6次産業化した食をアメリカに売り込み、成功する話。B級グルメを輸出しようというアイデアや登場人物の造形など一応うまく出来ている。頑迷固陋な農協組合長の描き方が陳腐なのが気になるけれども。（浅野 純次）